

〈論文〉

日韓母語場面の LINE チャットの 会話における相づちの特徴

—— 共話と対話の観点から ——

倉 田 芳 弥

要 旨

本研究は、LINE チャットの会話における相づちの頻度と表現形式について日本語母語場面と韓国語母語場面を比較した。その結果、LINE チャットの会話においても音声会話同様、日本語母語場面の方が韓国語母語場面より相づちの頻度は高かった。表現形式については、日本語母語場面と韓国語母語場面では使用傾向に違いが見られ、日本語母語場面は、「概念的表現」、「繰り返し」といった具体性の高い相づちが有意に多く、一方、韓国語母語場面は「感声的表現」が有意に多く、即時的に簡潔に相づちを送信することにより、話し手の話の内容自体に踏み込んだり、話を遮ったりしないという傾向が見られた。これらの結果から、LINE チャットの会話においても音声会話と同様に、日本語母語場面の相づちには、話し手の話への積極的な関わりを示す共話的な特徴が、韓国語母語場面の相づちには話し手の話を遮らず、話し手と聞き手の立場を明確にする対話的な特徴が見られることが明らかになった。

キーワード：LINE, チャット, 相づちの頻度と表現形式, 日韓母語場面, 共話と対話

1. はじめに

会話は、参加者によって協働で達成されるものであり、会話の参加者は、時には話し手となって話を進め、時には聞き手となって、話し手の話を受け止めたり、促したりする。「話し手が話を進めていくためには、聞き手からの反応や働きかけや助けが必要」(堀口, 1988: 14)で、話し手は聞き手の反応などを見ながら話を進めたり、説明を加えたりする。このように会話の成立には、話し手と聞き手の双方が重要であり、聞き手の反応を示すものの一つに相づちがある。これまでの音声会話の相づちの研究により、相づちを用いた聞き手の言語行動は、言語により異なることが指摘されている。例えば日本語と韓国語の相づちの頻度を比較した姜 (2001)、洪 (2007) によると、韓国語よりも日本語の方が相づちの頻度が高く、日本語には、「話し手と聞き手の二人で作っていく」(水谷, 1993: 6) という共話的な特徴が見られ (姜, 2001)、韓国語には、「聞き手は話し手の文ないし発話が完結するのを黙って待つ」(水谷, 1993: 6) という対話的な特徴が見られた (洪, 2007) という。

会話において重要な役割を果たす相づちは、音声会話で見られるだけではない。近年、スマートフォン等で利用されるチャットや通話機能を提供するアプリケーションである LINE や KakaoTalk, WeChat などが、日常的に用いられるようになりつつある。日本では、LINE が多く用いられている (総務省情報通信政策研究所, 2021) が、この LINE のチャット機能を用いたやりとり (以下、LINE チャットの会話) においても相づちが見られることが指摘され (岡本, 2016; 倉田, 2018, 2021, 2022 等)、これらの研究により、日本語母語場面、接触場面の LINE チャットの会話に見られる相づちについて、音声会話とはまた異なる特徴が明らかにされつつある。

しかしながら LINE チャットの会話について異なる母語場面を比較対照した研究は限られており、相づちを分析した研究としては、日本語母語場面と韓国語母語場面を分析対象とした倉田（2021, 2022）があるが、両研究とも日韓接触場面の解明を目的としたものであり、日本語母語場面と韓国語母語場面の比較は行っていない。倉田（2021）は相づちの表現形式について、倉田（2022）は相づちの送信方法について、日韓接触場面に参加する日本語母語話者と韓国人非母語話者の様相を明らかにすることをそれぞれ目的とし、①日韓接触場面の日本語母語話者と韓国人非母語話者の比較分析、②日韓接触場面の日本語母語話者と日本語母語場面の日本語母語話者の比較分析、③日韓接触場面の韓国人非母語話者と韓国語母語場面の韓国語母語話者の比較分析を行っている。そのため、倉田（2021, 2022）では、日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちの分析結果は示されているものの、日本語母語場面と韓国語母語場面については、統計分析を含む量的な比較分析や、会話の分析を通じた質的な比較分析は行われていない。倉田（2021, 2022）により、日韓接触場面で用いられる日本語母語話者と韓国人非母語話者の相づちは、それぞれの母語場面で用いられる時とは、同じではない場合があることが明らかになっている。そのため日韓接触場面という異文化間の会話に参加する日本語母語話者と韓国人非母語話者の比較だけでなく、母語話者同士の会話となる日本語母語場面の会話と韓国語母語場面の会話の比較も必要である。

そこで、本研究では、日本語母語場面と韓国語母語場面の LINE チャットの会話における相づちについて比較分析して相違点を明らかにし、日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちを用いた会話の特徴の一端を明らかにするため、音声会話で指摘されている水谷（1993）が示した共話と対話の概念を用いて考察を試みる。

2. 先行研究

2.1 共話と対話

共話と対話の概念は、日本語と英語の話し方の特徴を明らかにするため、水谷（1988, 1993, 2001 等）により示された。水谷（1993）によると、「対話は、二人の話し手がそれぞれ自分の発話を完結させてから相手の話を聞く形で、聞き手は話し手の文ないし発話が完結するのを黙って待つのが基本」（p. 6）であるのに対して、日本語の話し方として特徴的な「共話」は、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく」（p. 6）ものである。相づちを頻繁に打ちながら進める共話的な話し方は、話し手の話の途中に聞き手の相づちが入り、ときには相づちが句末と重なったり、未完成の文を引き取って完結させたりするものだという。

水谷（2001）は、対話型の話し方は英語によく見られる話し方だと述べている。このように、もともと「共話」という考え方は、英語との比較により、日本語の話し方の特徴を示したものである。しかし、その後の研究により、英語以外の韓国語、中国語、インドネシア語と日本語の相づちを比較した研究においても水谷（1993）の共話と対話をういた説明が行われている（姜, 2001; 洪, 2007; 呂, 2010; アブリヤント, 2015 等）。これらの研究において、日本語以外の言語について共話的な特徴を指摘した研究はなく、共話的な話し方は日本語に特徴的なものであることがわかる。

日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちの比較から共話と対話について述べているものに姜（2001）、洪（2007）等がある。姜（2001）は、相づちの頻度、機能、表現形式について日本語母語場面と韓国語母語場面を比較し、日本人は韓国人より相づちを頻繁に打つだけでなく、同意、共感、感情の共有機能の相づちを積極的に示すことにより、話し手の発話に

積極的に協力し、話し手と共同で発話を作り上げるという共話の傾向が強かったと述べている。また、表現形式については、日本語母語場面の方が韓国語母語場面より、繰り返し、先取り、言い換えの割合が高く、話し手の発話に積極的に参加し、話し手と共同で発話を作っていたとしている。

洪（2007）は、日本語母語場面の方が韓国語母語場面より相づちの頻度が高いことを示し、水谷（1993）の共話と対話という二つの類型から見たとき、韓国語の話し方は対話に近いとしている。

以上のように、音声会話において日本語母語場面の相づちについては、共話的な特徴が、韓国語母語場面については対話的な特徴が見られることが、相づちの頻度、表現形式、機能の分析などから明らかにされている。しかし LINE チャットの会話を対象とし、日本語母語場面と韓国語母語場面における相づちにはどのような特徴が見られるのか、共話と対話の観点から分析したものはない。本研究では、音声会話の相づちの研究で得られた共話と対話の知見をもとに考察できるよう、既に共話・対話の概念から分析されている相づちの頻度と表現形式を取り上げ、日本語母語場面と韓国語母語場面の LINE チャットの会話に見られる相づちを比較し、共話と対話の観点から考察を試みる。

2.2 相づちの頻度に関する先行研究

相づちの頻度に関して、日本語母語場面と韓国語母語場面では、異なる特徴が指摘されている。「相手がうなずいた場合は別として、黙って聞いていれば、話し手は必ず不安になる」（水谷, 2001: 47）として、話し手の話の途中で相づちを頻繁に打つ話し方が日本語の話し方の特徴であると指摘されている（水谷, 1993）。一方で、韓国語では、相づちを多く打つ人に対して、マイナス評価をすることがあるという（生越, 1988; 任・李, 1995）。

実際に、音声会話の日本語母語場面と韓国語母語場面を比較した場合、

日本語母語場面の方が、韓国語母語場面よりも頻度が高いという結果が出ている（任・李, 1995; 姜, 2001, 2004; ^{カン}강, 2009; 崔, 2011）。

音声会話の日本語母語場面では、相づちが打たれる箇所は、話者交替が起こりうる「移行適切場」（Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974）だけでなく、話し手がポーズを取ったとき（水谷, 2001）や、ポーズのとき以外の発話の途中においても話し手の発話に重ねて相づちが打たれるという（永田, 2004）。相づちの頻度と出現箇所の関係については、崔（2011）が音声会話の日韓母語場面を比較し、日本語母語場面の相づちの頻度の高さは、発話途中に打たれた相づちの頻度が高いことによると指摘している。

LINE チャットの会話では、話し手の判断によってある程度のまとまりのある文字列を一つのメッセージとして送信するため、メッセージとメッセージの間にしか相づちを挿入することはできない。メッセージとメッセージの間を話し手のポーズに相当するものと考ええると、LINE チャットの会話では、話し手がメッセージを分割送信することによって、話し手のポーズに相当する箇所でも相づちを打つことはできる。しかし、LINE チャットの会話では、音声会話のように話し手の発話途中に重ねて相づちを送信することはできない。日本語母語面で頻度が高いとされる発話途中に重ねて打つ相づち（崔, 2011）を LINE チャットの会話では送信することができないため、日本語母語場面の LINE チャットの会話の相づちの頻度は韓国語母語場面と比べて大きな差が見られなくなる可能性が考えられる。つまり、システム上の特性が影響し、日本語の相づちに特徴的だとされる、相手のメッセージに対して頻繁に相づちを入れつつやりとりを進めるという話し方が、日本語母語場面の LINE チャットの会話で起こりにくい可能性がある。

しかし、実際に LINE チャットの会話の相づちの頻度と出現箇所について分析した研究はない。出現箇所については、倉田（2022）が日本語母語場面、韓国語母語場面について分析しているが、相づちの送信方法の特徴

を出現箇所との関係から明らかにすることを目的としており、頻度との関係については明らかにしていない。倉田（2022）では、直前のメッセージに対して送られた相づち（直後の相づち）と、離れたメッセージに対して送られた相づち（非直後の相づち）に分類したところ、日本語母語場面では「直後の相づち」と「非直後の相づち」とも約 5 割であるのに対し、韓国語母語場面では「直後の相づち」が約 8 割、「非直後の相づち」が約 2 割であったという⁽¹⁾。

LINE チャットの会話の頻度について日本語母語場面と韓国語母語場面对象として比較分析したものはなく、この点について明らかにする必要がある。また、本研究では頻度の結果については、倉田（2022）の出現箇所の知見をもとに考察する。

2.3 相づちの表現形式に関する先行研究

LINE チャットの会話においては、非言語情報が伝達されなかったり、入力する時間が必要であったりと音声会話とは異なる媒体の特性が見られる。そのため、高速のやりとりを可能にするために極端に簡略化した言葉遣い⁽²⁾を用いることが日本語母語場面について指摘されており（西川・中村, 2015）、また韓国語母語場面においても、音声会話と同じペースでやりとりができるよう、省略などが見られるという（^{チニ}他, 2012⁽³⁾）。このように文字の入力時間ややりとりのペースが相づちの表現形式にも影響を与える可能性が考えられる。やりとりのペースについては、倉田（2022）が LINE チャットの会話の相づちの送信方法の分析に先立ち、分析データの特性として各場面の同期性の程度を調べている。1 分当たりの送信メッセージ数を調べたところ、韓国語母語場面の送信メッセージ数が最も多く同期性の最も高い場面であり、次いで、日韓接触場面、日本語母語場面の順だったという。倉田（2022）では、接触場面の同期性の程度から接触場面の送信方法について考察しているが、相づちの表現形式への影響につい

ては明らかにされていない。そこで本研究では、表現形式の結果の考察にあたり、同期性の程度も考慮に入れて行う。

次に相づちの表現形式の主な分類を表1に示す。LINE チャットの会話の相づちの表現形式を分析した倉田（2021）は、小宮（1986）と堀口（1997）の枠組みをもとに概念的表現をソ系とその他に分けて分類している。本研究も倉田（2021）に従い分析する。

表1 相づちの表現形式の主な分類の比較

| 音声会話 | | | | LINE チャットの会話 | |
|------------------------------------|----------|--|--------------------|--------------|--------------------|
| 小宮（1986） | 堀口（1997） | 大浜（2002） | 姜（2001） 姜（2009） | 倉田（2021） | |
| 感声的表現 ハ系, エ系, ア系, ン系, その他 | 相づち詞 | 感声的表現の相づち あ系, うん系, え系, お系, はい系, ふーん 系, へー系, ほー系, まあ系 | 相づち詞 | 相づち詞 | 感声的表現 |
| 概念的表現 「ナルホド」 「ホント」等 | | 概念的表現の相づち そう系, すごい系, 本 当系, うそ系, いい系, 文末系, 繰り返し系 | | | 概念的表現 ソ系 その他 |
| 繰り返し | 繰り返し | | 繰り返し | 繰り返し | |
| — | 言い換え | — | 言い換え | 言い換え | |
| — | 先取り | — | 先取り | 先取り | |
| — | — | — | コメント | — | |

音声会話における相づちの表現形式についてみると、「相づち詞」が圧倒的に多いということが、日本語母語場面、韓国語母語場面に共通して指摘されている（小宮, 1986; 姜, 2001; 大浜, 2002; 강, 2009 等）。また日韓母語場面の比較から、韓国語母語場面の方が日本語母語場面よりも「相づち詞」の使用率が高いことが言われており（姜, 2001; 강, 2009）, 「繰り返し」, 「言い換え」, 「コメント」など「広義のあいづち」を日本人は韓国人よりも頻繁に用いていたという（姜, 2001）。ここから日本語母語場面では、韓国語母語場面と比較して、より具体的な意味内容を持つ相づちを多

く用いる傾向が見て取れる。さらに「相づち詞」を「うん」「おっ」といった「感声的表現」と「そうですね」「まじ」といった「概念的表現」に分けて見ると、日本語母語場面においては、「感声的表現」の方が多い（小宮, 1986; 大浜, 2002）。一方、韓国語母語場面について、「相づち詞」の下位分類を行った研究はない。ただし姜（2001）は、「相づち詞」の表現のバリエーションの数について日本語母語場面と韓国語母語場면을対象に調べており、それによると日本語母語場面の方が韓国語母語場面よりも「相づち詞」の表現のバリエーション数が多く、日本人は韓国人に比べ様々な「相づち詞」を用いて相手の発話を聞いていることを積極的に示したという（姜, 2001）。

LINE チャットの会話を分析した研究については、倉田（2021）が日韓接触場面の相づちの表現形式について分析している。倉田（2021）は、日韓接触場面の会話に見られる相づちの様相を明らかにすることを目的とし、日韓接触場面の会話に参加する日本語母語話者と韓国人非母語話者を比較したところ、両者の用いる相づちの表現形式には違いが見られ、「概念的表現（その他）」は日本語母語話者の方が多いのに対して、「感声的表現」は韓国人非母語話者の方が多かったとしている。さらに倉田（2021）では、日韓接触場面の日本語母語話者と日本語母語場面の日本語母語話者の比較と、また日韓接触場面の韓国人日本語非母語話者、すなわち韓国語母語話者と韓国語母語場面の韓国語母語話者の比較を行っている。その結果、日韓接触場面において、日本語母語話者も韓国人非母語話者もそれぞれの母語場面での相づちの表現形式の用い方の影響が見られ、日韓接触場面の日本語母語話者には共話的な特徴が、韓国人非母語話者には対話的な特徴がそれぞれ見られたとしている。しかし、倉田（2021）では、日本語母語場面と韓国語母語場面の比較は行っていないため、両母語場面の相づちの表現形式の使用傾向に量的な違いが見られるのか、また、違いが見られた場合、日本語母語場面に共話的な特徴が、韓国語母語場面对話的な

特徴が見られるのかといった点については明らかにされていない。LINE チャットの会話の日韓接触場面に、両場面の特徴がどのように影響しているかを詳細に明らかにするためには、日本語母語場面と韓国語母語場面の相違点を明らかにする必要がある。

3. 研究目的及び研究課題

本研究は、日本語母語場面と韓国語母語場面の LINE チャットの会話に見られる相づちの特徴を頻度と表現形式の観点から明らかにすることを目的とする。

課題 1：日本語母語場面と韓国語母語場面の LINE チャットの会話における相づちの頻度に違いは見られるか。

課題 2：日本語母語場面と韓国語母語場面の LINE チャットの会話における相づちの表現形式の使用傾向に違いは見られるか。

4. 分析方法

4.1 分析データ

本研究は、2015～2018 年に行われた LINE の文字チャットを用いたやりとり⁽⁴⁾を対象とする。調査対象者の年齢は 19～36 歳であり、データをできる限り統制するため、全員女性友人同士とした。日本語母語場面は、日本語母語話者 34 名 (JNS1～34) による 22 組の会話データ、計 6,951 メッセージ、韓国語母語場面は、韓国語母語話者 33 名 (KNS1～33) による 20 組の会話データ、計 6,908 メッセージをデータとする。なお、収集データの量は 1 組あたり直近の 500 メッセージを上限とした。

4.2 相づちの定義及び分析対象とする相づち

堀口（1997: 77）は、相づちを「話し手が発話権を行使している間に聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」としており、本研究では、堀口（1997）を参考に、相づちを「話し手から送られた情報に対して、聞き手として反応する表現」と定義する。また、本研究では、堀口（1997）を参考に、「相づち詞」「繰り返し」「言い換え」「先取り」を分析対象とする相づちとしたが、このうち「先取り」は本研究の分析対象とするデータには見られなかった。

本研究では、小宮（1986）に従い、質問、呼びかけ、命令や要請等、話し手が積極的に応答を求めたものに対する応答は、聞き手として反応する表現ではないと考え、相づちとしない。また、「実質的な発話」（杉戸, 1987: 88）⁽⁵⁾ は「話し手」によって伝える表現であると考え、相づちとしない。

また、堀口（1997）は、笑いや頷きといった非言語的なものは、相づちに含めていない。本研究も堀口（1997）に従い、絵文字、顔文字、スタンプ（絵のみのもの）等、非言語的要素は、分析対象外とする。ただし、スタンプの中には文字を含むものもあり（西川・中村, 2015; 岡本・服部, 2017）、これらの文字については分析対象とし、相づちの認定を行った。

日本語母語場面の相づちの認定については、筆者と日本語教育を専門とする日本語母語話者の研究協力者が、分析対象の 20% についてそれぞれ相づちを認定して一致率を求め、残りのデータについては筆者が相づちの認定を行った。分析対象の 20% の相づちの認定の一致率をカッパ係数により求めたところ、 $k=.91$ であった。またその際、不一致だったものについては、協議の上、相づちと認定するかどうかを決定した。

韓国語母語場面の相づちの認定については、分析対象の 35% を筆者と日本語教育を専門とする韓国語母語話者の研究協力者がデータを確認し、

協議の上相づちの認定を行った。残りについては筆者が相づちを認定した。

4.3 相づちの頻度の分析方法

相づちの頻度を求めるには様々な方法がある。音声会話では、時間当たりの頻度（水谷, 1988; 任・李, 1995; 姜, 2001, 2004; ^{カン}姜, 2009 等）、音節当たりの頻度（渡辺, 1994 等）、相づちと相づちの間の音節数（水谷, 1988; 李, 2001; 宮永, 2013 等）、発話文当たりの頻度（黒崎, 1987; 大塚, 2016 等）などがある。また、PC のチャットの会話については、メッセージ当たりの頻度（倉田, 2006）がある。本研究では、PC のチャットの会話同様にメッセージが一つの塊として送信され、メッセージの途中に相づちを挿入することはできないという LINE の会話の特性を考慮し、倉田（2006）と同様にメッセージを単位として、100 メッセージ当たりの頻度を求める。相づちの数え方については、相づちの表現形式に基づき、生起数を数える。但し「そうそう」のように同じ表現形式を繰り返している場合は、一つと数える。

課題 1 では、まず上記の方法により、日本語母語場面と韓国語母語場面について調査対象者ごとの 100 メッセージ当たりの相づちの頻度を求める。そして、日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちの頻度に統計上有意差が見られるかどうかを調べるため、 t 検定を行う。

4.4 相づちの表現形式の分析方法

本研究の相づちの表現形式の分析枠組みは表 2 の通りである。堀口（1997）、小宮（1986）の枠組みをもとに、概念的表現の下位分類として、「ソ系（韓国語母語場面の場合、ユ系⁽⁶⁾）」と「その他」を設けた倉田（2021）の枠組みを分析枠組みとした（表 2 参照）。

表 2 相づちの表現形式の分析枠組みの定義及び例

| 表現形式の分類 | | 定義 | 日本語の例 | 韓国語の例 |
|---------|-------------|----------------------------|---|--|
| 相づち詞 | 感声的表現 | 感声的で概念を指さない表現。 | あー, ええ, へえ, うん, お, ほお 等 | 아 (あ), 허 (へー), 응 (うん), 오 (お), 아하 (そっか) 等 |
| | 概念的表現 | 概念を表す言語形式だが感動詞的に用いられるもの。 | そう, そっか, そうだね, そうなんだ 等 | 그래 (そう), 그치 (だよね) 그렇구나 (そうなんだ) 等 |
| | ソ／ユ系 その他 | | だよね, なるほど, 確かに, 本当, まじ, うそ 等 | 맞아 (そう), 진짜 (本当), 세상에 (何てこと) 等 |
| 繰り返し | | 話し手のメッセージの全部または一部を繰り返すもの。 | JNS3 : (前略) 今日は国会図書館だったの！ (後略) JNS4 : <u>国会図書館か</u> | KNS10 : 문학이랑... (文学と...) KNS12 : 문학... (文学...) KNS10 : 철학도 (哲学も) |
| 言い換え | | 話し手のメッセージの全部または一部を言い換えるもの。 | JNS16 : 下北沢いきたい！ (後略) JNS14 : <u>下北か！</u> | — |

※例はいずれも本データのものであり、原文のままである。会話例 1～4 も同様。本データに「先取り」は見られなかったため、「先取り」以外のものを示した。韓国語母語場面のデータに「言い換え」は見られなかったため、「—」としている。会話例の下線は相づちを表す。
※韓国語の例の括弧内は、日本語訳である。調査協力者が訳したものを日本語教育が専門の韓国語母語話者 2 名と筆者が確認し、修正した。会話例 2, 4 の日本語訳も同様。

まず、表 2 の相づちの表現形式の枠組みに従って相づちを分類する。相づちの表現形式の分類については、上述の通り「そうそう」のように同じ表現形式を繰り返している場合は、一つと数える。「あーそっか」などのように表現が異なる場合は、異なるものとして分類する。例えば「あーそっか」の場合、「あー」は、「相づち詞」の「感声的表現」に分類し、「そっか」は相づち詞の「概念的表現」の「ソ／ユ系」と分類する。

課題 2 では、まず、日本語母語場面と韓国語母語場面で見られた相づちの表現形式の構成比をそれぞれ求める。次に、日本語母語場面と韓国語母語場面について、表現形式の使用傾向に統計上の有意差が見られるかどうかを調べるため、カイ二乗検定を行う。

5. 結果と考察

5.1 相づちの頻度（課題 1）

5.1.1 結果

日本語母語場面の相づちは、総メッセージ数 6,951 中、619 回見られ、韓国語母語場面では、相づちは総メッセージ数 6,908 メッセージ中、448 回見られた。日本語母語場面と韓国語母語場面の調査対象者の 100 メッセージ当たりの相づちの頻度の平均を表 3 に示す。表 3 を見ると、日本語母語場面の相づちの頻度は、100 メッセージ当たり 8.9 回であり、韓国語母語場面の相づちの頻度は、100 メッセージ当たり 6.6 回と、日本語母語場面の方が相づちの頻度は高い。両場面の相づちの頻度に違いが見られるか t 検定を行ったところ、有意差が見られた ($t(82) = -2.169, p < .05$)。

表 3 日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちの頻度

| | 日本語母語場面 $M (SD)$ | 韓国語母語場面 $M (SD)$ | t 値 |
|-----------------------------|---------------------|---------------------|---------|
| 100 メッセージ当たりの相づち の頻度の平均値 | 8.9 回 (5.31) | 6.6 回 (4.18) | -2.169* |

※ * $p < .05$

5.1.2 考察

LINE チャットの会話においても、音声会話と同様に、日本語母語場面の方が韓国語母語場面よりも相づちの頻度が高い傾向が見られた。先行研究で述べた通り、音声会話で日本語母語場面と韓国語母語場面に差があるとされる発話途中の相づち（崔, 2011）を LINE チャットの会話では送信できないのだとすると、日本語母語場面と韓国語母語場面の相づちの頻度の差はどこに見られるのだろうか。

LINE チャットの会話における相づちの出現箇所を直後の相づちと非直後の相づちに分けて分析した倉田（2022）によると、日本語母語場面では、韓国語母語場面より「非直後の相づち」が多く、離れたメッセージに対してより多くの相づちを送信しているという。会話例 1 は、日本語母語場面の離れたメッセージに対して相づちを送信している例である。

会話例 1 離れたメッセージに対する相づちの例（日本語母語場面）

6 月 5 日

236 23:51 JNS10 あくまでわたしのイメージやけどな 笑
やってみないとわかんないからいろんなの
やってみればいいと思われ

237 23:52 JNS10 なんかに夜更かししちゃう人って、1 日が充実し
てないって感じてる人らしいぞ

238 23:53 JNS10 がんばる

239 23:53 JNS10 茶香行きたい！
何時に行けば食べれる？

240 23:53 JNS10 でてても聞いてないんだよなあ（´_ゝ´）

6 月 6 日

→ 241 11:53 JNS9 そう、いろいろやってみたいとは思ってる！！

→ 242 11:53 JNS9 あ、それ分かるきがする
夜更かしの基準もよくわかんない

243 11:53 JNS9 10 時に並んでお昼に入れるかんじかなー

※左から、「→」は注目すべきメッセージ、メッセージ番号、送信時間、送信者、送信内容を表す。以下の会話例も同様。また会話例の右側の線は、相づちがどのメッセージに対して送信されたものかということを表す。

JNS10 が 236 から 240 まで連続送信すると、JNS9 は、241 で、236 のアドバイスに対して、「そう」と相づちを打ってから、実質的な内容とともにメッセージを送信している。JNS9 は、続けて、242 で「あ」と相づちをメッセージの冒頭に付けて送信している。相づちは、聞き手として相手の発話に反応するものであるため、この相づちが冒頭につくことによ

り、242 のメッセージは、JNS9 自身が送信した 241 の話の続きを送信しているのではないことが示され、237 に対して聞き手として反応を示してから返答していることがわかる。

一方、韓国語母語場面では、連続送信に対する相づちの送信の仕方は日本語母語場面とは異なる特徴が見られる。

会話例 2 は韓国語母語場面の相手の連続送信に対する相づちの例である。KNS4 は卒業後の進路に対する意欲がわからないという話をしているところである。KNS3 は KNS4 が二つ連続でメッセージを送信したところ(20, 21) で「아아아아 (ああああ)」(22) と相づちを送信している。KNS4 が 20 と 21 で、連続でメッセージを送信した後で、KNS3 が 20 と 21 に対してそれぞれ別の相づちを用いて反応を示すことも可能であるが、KNS3 はそのような反応の示し方はしていない。そして、KNS4 がさらに二つのメッセージ (23, 24) を送ったところで、KNS3 は「뭔가 알겠군 (何かわかるな)」(25) と相づちは用いず、話し手として実質的な発話だけで、全体に対する感想を述べている。

会話例 2 連続送信に対する「直後」の相づちの例 (韓国語母語場面)

- | | | | | |
|------|------|------|-------------------------------|---------------------------------------|
| 20 | 5:19 | KNS4 | 그냥 내가 로스쿨에 대한 의욕이 없어서 그런가마 | ただ私がロースクールへの 意欲がないからこうなっ ているのかも |
| 21 | 5:19 | KNS4 | 만약 잇었으면 엄청 우울 에서 못 벗어났을지도 | もしあったらめっちゃ憂鬱 から抜け出せなかったかも |
| → 22 | 5:19 | KNS3 | 아아아아 | ああああ |
| 23 | 5:19 | KNS4 | 사실 객관적으로는 모랄까 | 實際客観的には何ていうか |
| 24 | 5:19 | KNS4 | 지금 포기하는게 이득이야 | 今諦めた方がいいわ |
| 25 | 5:19 | KNS3 | 뭔가 알겠군 | 何かわかるな |

以上のように、相づちの頻度に関して、日本語母語場面では、発話途中

の相づちが送信できない LINE チャットの会話でも、離れたメッセージに対して事後的に多くの相づちを送信して反応を示すことにより、相づちの頻度が高くなることが考えられる。一方、韓国語母語場面では、相手が連続で送信したメッセージ全てにそれぞれ別に相づちを用いて返信するのではなく、直前のメッセージに対して相づちを送信したり、直前のメッセージを含む分割送信した複数のメッセージに対してまとめて相づちを送信することが多く、このことが相づちの頻度の低さにつながっている可能性が考えられる。

5.2 相づちの表現形式（課題 2）

5.2.1 結果

日本語母語場面と韓国語母語場面で見られた相づちを表現形式で分類した結果を表 4 に示す。本データにおいて、「言い換え」は日本語母語場面で 2 回のみ見られ、韓国語母語場面では見られなかった。そのため、「言い換え」は「繰り返し」に含めて示す。

まず、日本語母語場面について見る。音声会話と同様「相づち詞」がそのほとんどを占めており、「繰り返し」は全体の 7% にすぎない。「相づち詞」の内訳を見ると「感声的表現」37%、「概念的表現」が 56% であり、音声会話とは異なり「感声的表現」より「概念的表現」の方が多い。さらに「概念的表現」の内訳を見ると、「ソ系」は 21%、「その他」は 35% であり、「概念的（その他）」の割合の方が多いという結果であった。

次に韓国語母語場面を見ると、日本語母語場面と同様、「相づち詞」がそのほとんどを占めており、「繰り返し」は全体の 2% だけであった。「相づち詞」の内訳を見ると、「感声的表現」が 71%、「概念的表現」が 27% と「感声的表現」の方が多い。「概念的表現」の内訳を見ると「コ系」が 15%、「その他」が 12% と「概念的表現（コ系）」の方がやや多い。

日本語母語場面と韓国語母語場面の表現形式の使用傾向に違いが見られ

るか、カイ二乗検定で調べたところ、有意差が見られ ($\chi^2(3) = 132.11$, $p < .01$), 残差分析の結果 (表5 参照), 全ての項目について有意差が見られた。感声的表現は、韓国語母語場面の方が有意に多く、それ以外の概念的表現 (ソ/ユ系), 概念的表現 (その他), 繰り返しについては、日本語母語場面の方が有意に多かった。

表4 相づちの表現形式の割合及び頻度
(日本語母語場面と韓国語母語場面)

| | 相づち詞 | | | 繰り返し | 計 |
|-------------|----------------|----------------|----------------|--------------|-----------------|
| | 感声的表現 | 概念的表現 | | | |
| | | ソ／ユ系 | その他 | | |
| 日本語 母語場面 | 37% (230 回) | 21% (129 回) | 35% (218 回) | 7% (42 回) | 100% (619 回) |
| 韓国語 母語場面 | 71% (319 回) | 15% (68 回) | 12% (53 回) | 2% (8 回) | 100% (448 回) |

表5 相づちの表現形式の残差分析の結果

| | 相づち詞 | | | 繰り返し |
|---------|---------|-------|--------|--------|
| | 感声的表現 | 概念的表現 | | |
| | | ソ／ユ系 | その他 | |
| 日本語母語場面 | −11.0** | 2.4* | 8.7** | 3.8** |
| 韓国語母語場面 | 11.0** | −2.4* | −8.7** | −3.8** |

※* $p < .05$, ** $p < .01$

5.2.2 考察

以下では、まず、日本語母語場面、次に韓国語母語場面について考察し、最後に両場面を併せて考察する。

日本語母語場面で、有意に多かった「概念的表現」, 「繰り返し」は概念

を示す表現である。日本語母語場面では、「感声的表現」よりも、「概念的表現」や「繰り返し」など概念を示す表現を用いて、より具体的な内容を相づちで送信していると考えられる。さらに、日本語母語場面では、「概念的表現」の中でも定型的な「ソ系」という指示表現の相づちよりも、より具体的な概念を持つ「概念的表現 (その他)」の相づちの方が多く用いられている。このように日本語母語場面では、相づちの表現形式は、具体的な概念を持つ表現形式を多用する傾向があると考えられる。

会話例 3 は日本語母語場面の「概念的表現 (その他)」と「繰り返し」の例である。この例は予定の確認場面で、118 で JNS5 は直前の JNS3 の予定に対して「なるほど」と「概念的表現 (その他)」の相づちを送信している。続いて JNS5 の 118 の一部を繰り返して、JNS3 は「ES なー」と「繰り返し」の相づちを送信し、相手の発話の一部を繰り返すことで、何に対する相づちであるかを具体的に明示していると考えられる。また、「引き継ぎ式」に参加するという JNS5 の 121 のメッセージに対して、JNS3 は 122 で「なるー」と「概念的表現 (その他)」の表現を用いて相づちを送信している。

会話例 3 「概念的表現 (その他)」及び「繰り返し」の例 (日本語母語場面)

- 117 18:12 JNS3 多分大丈夫だと思うけどまだ色々どうなるか分からぬ〜 (´Д`)
もしできたら 3/29 ~ 4 月初め頃で空いてる日あったりしないかな? (^^;;
- 118 8:54 JNS5 なるほど…! そのあたり ES 締め切りに追われてて厳しそう
(ε:;)o 昇天の舞 【概念的 (その他)】
- 119 9:45 JNS3 ES なー::(〇´~`〇):: じゃあ 4 月の後半にしよう!
【繰り返し】
- 120 9:45 JNS3 そういえば今日の引継式はいく?
- 121 9:51 JNS5 ウィッヾ・w・▽引き継ぎ式行くよー!
- 122 10:43 JNS3 なるー! 分かんないけどもしかしたら行けるかも
・*:; ≡ (ε:;) 【概念的 (その他)】

※【 】は表現形式の種類を表す。

「繰り返し」について小宮（1986）は、「より積極的に相手に近づき働きかける表現」（p.51）だとしている。また、日韓母語場面を比較した姜（2001）は、日本語母語場面の方が韓国語母語場面より、「繰り返し」「言い換え」「先取り」の割合が高く、日本人はより能動的な意味を持つ相づちを用いて、話し手の発話に対し、強い共感と高い関心を示しているとしている。LINE チャットの会話でも、音声会話と同様、日本語母語場面の方が韓国語母語場面より「繰り返し」は有意に多く、日本語母語場面では、「概念的表現」や「繰り返し」で具体的な内容を送信し、相手への強い共感や高い関心を示していると考えられる。

一方、韓国語母語場面では、「感声的表現」が有意に多かった。「概念的表現」や「繰り返し」は、具体的な概念を持つものに対して、「感声的表現」は具体的な概念を持たないため、韓国語母語場面では、簡潔に相づちを送信する傾向があると考えられる。

会話例 4 は、受講する授業について、KNS13 が聴解の授業ではなく日本語演習の授業を取るか考え中だと話しているところで、KNS15 は、232, 233, 236 で「感声的表現」の相づちを送信している。この三つの「感声的表現」はいずれも同じ音を繰り返すものであり、素早く入力し相づちを送信できると考えられる。ここで実質的な発話を送信することはなく、聞き手としての反応を「感声的表現」で、簡潔に示していることがわかる。

会話例 4 「感声的表現」の例（韓国語母語場面）

| | | | | |
|-------|---------|-------|------------------|-------------|
| 230 | 23 : 43 | KNS13 | 나 그냥 청해말고 | 私まあ聴解じゃなくて |
| 231 | 23 : 43 | KNS13 | 너랑같이 | KNS15 と一緒に |
| → 232 | 23 : 43 | KNS15 | <u>응응</u> 【感声的】 | <u>うんうん</u> |
| → 233 | 23 : 43 | KNS15 | <u>오오오</u> 【感声的】 | <u>おおお</u> |
| 234 | 23 : 43 | KNS13 | 일본어연습 들을까 | 日本語演習取るか |
| 235 | 23 : 43 | KNS13 | 생각중! | 考え中! |
| → 236 | 23 : 43 | KNS15 | <u>오오오</u> 【感声的】 | <u>おおお</u> |

また韓国語母語場面では、「繰り返し」はほとんど用いられなかったが、これも韓国語母語場面では簡潔な相づちが好まれるためだと考えられる。繰り返しは「感声的表現」と比べて長くなりやすく、相手の話を遮る可能性がある。韓国語母語場面では、概念を持たない簡潔な「感声的表現」を多く用いて、相手の話の内容に踏み込んだり、遮ったりしないで、聞き手としての反応を示している様子が窺える。

日本語母語場面と韓国語母語場面の表現形式には、同期性の高さの影響も考えられる。日本語母語場面、韓国語母語場面、日韓接触場面の同期性の程度について1分当たりの送信メッセージ数から調べた倉田（2022）によると、韓国語母語場面の送信メッセージ数が最も多く、同期性の最も高い場面であり、次いで、日韓接触場面、日本語母語場面の順だったという。

日本語母語場面は、韓国語母語場面よりも「繰り返し」が有意に多く、入力に時間がかかる相づちの表現が多く使われている。日本語母語場面においては送信のペースがあまり速くないため、入力に時間のかかる「繰り返し」が利用しやすい可能性や「繰り返し」を用いているために、送信のペースが遅くなっている可能性が考えられる。一方、韓国語母語場面の場合、「繰り返し」はほとんど見られず、「感声的表現」が多く用いられている。韓国語母語場面では、同期性の高いやりとりが行われるために、即時性が優先され、瞬間的で反射的な感情や認識の変化を表したりする「感声的表現」が多く使われ、臨場感を示しつつ、短い表現で早く反応を示していることが推察される。

以上のように同期性の程度と相づちの表現形式については何らかの関係があることが考えられ、今後はこの観点に着目した分析が必要である。

6. 総合的考察

本章では、日韓母語場面の相づちの頻度と表現形式について、共話と対話の観点から考察を試みる。

日本語母語場面の場合、韓国語母語場面と比べて相づちの頻度が高く、また多くのメッセージに相づちを送信して反応を示していた。これは、相づちの送信が遅れても直前のメッセージだけでなく、離れたメッセージに対しても多くの相づちを送信する（倉田, 2022）ため、頻度が高くなっているという可能性が示唆された。また、表現形式では具体性の高い「概念的表現」や「繰り返し」が多く用いられることが明らかになった。

メッセージに対して多くの相づちを送信するという日本語母語場面の相づちの特徴には、話し手と聞き手が一緒に話を進める共話的な傾向が見られる。しかし、これは水谷（1993）が指摘した共話的な話し方と全く同じではない。共話的な話し方において、「聞き手がいづちを入れるのは話し手のほうに休止つまりポーズがあった時」（水谷, 2001: 49）であり、「話し手がポーズをおく時の心理は、ここであいづちを打てという、聞き手に対する働きかけである」（水谷, 2001: 49）という。LINE チャットの会話では、送信システム上、メッセージの途中に相づちを挿入することは不可能であり、相づちを送信できる機会は限定されるため、ポーズがあった時に相づちを打ったり、話し手の話の途中に発話に重ねて相づちを頻繁に打ったりするという音声会話の共話的な話し方とは異なる。しかし、LINE チャットの会話のメッセージとメッセージの区切り目が、音声会話でいうところのポーズに相当し、「ここで相づちを打て」というサインとして機能していると考えられる。聞き手はその働きかけを受けて、相づちを送信し、場合によっては、離れたメッセージに対しても相づちを送信することによって、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させる

のではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく」（水谷, 1993: 6）という共話的な話し方が実現しているのである。また、日本語母語場面の表現形式に関して具体的な内容を表す「概念的表現」や「繰り返し」が多いということも、LINE チャットの会話では、相づちを送信できる機会が限定されているため、具体性の高い相づちを多く用いることにより、聞き手として積極的に会話に関わる共話的な特徴が現れていると言える。

LINE チャットの会話の日本語母語場面において、共話的な話し方を行うために、反応が遅れても相づちを数多く送信するのは、日本語のあいさつについて指摘されている「後傾性」（奥津・沼田, 1985）や「反復確認型」（任・井出, 2004）という特徴とも関係があると考えられる。日本語のあいさつの表現には「先日はどうも」など、過去の出来事に言及した表現が多く、「後傾性」の特徴が見られるという（奥津・沼田, 1985）。また、任・井出（2004）は、過去の出来事に対して感謝や詫びを繰り返す日本語のあいさつを「反復確認型」と呼び、「重ね重ねあいさつすることが、円滑な人間関係の確認と維持につながる」（p.9）としている。日本語母語場面の LINE チャットの会話の相づちにおいても、過去のメッセージの送信に対しても重ね重ね相づちで反応を示し、共話的な話し方を行うことにより「円滑な人間関係の確認と維持」を行っていると推察される。

一方、韓国語母語場面は、日本語母語場面と比べて相づちの頻度は低かった。また、表現形式では「感声的表現」が多く、即時的に反射的な感情や認識の変化を表し、短く簡潔に相づちを送信して、話し手の話の内容自体に踏み込んだり、話を遮ったりしないという傾向が見られた。姜（2004）は、音声会話の韓国語母語場面では、相づちや重なりが少ないという結果から、韓国語母語場面では、話し手と聞き手がそれぞれ立場の違いを明確にし、発話を一人で完成させようとしていたとしている。本研究の韓国語母語場面の表現形式の結果も、姜（2004）の指摘する音声会話の韓国語母語場面と似た傾向が見られると考えられる。このような特徴から

LINE チャットの会話の韓国語母語場面においても、「聞き手は話し手の文ないし発話が完結するのを黙って待つ」（水谷, 1993: 6）という対話的な傾向が見られたと言える。

韓国語母語場面において、相づちの頻度が低いという対話的な傾向が見られたが、韓国語母語場面において、聞き手が会話に関わっていないというわけではない。韓国語母語場面では、相づちの多くが直前のメッセージ、あるいは直前のメッセージを含む分割して送信された複数のメッセージに対するものであり、相づちで多くの反応を示すことよりも、メッセージの「直後」に「感声的表現」の相づちですばやく反応することが優先されており、それにより、会話への関わりを示しているのである。

以上のように、LINE チャットの会話の日本語母語場面の相づちの特徴として共話的な傾向、韓国語母語場面の相づちの特徴として、対話的な傾向が見られることがわかった。

7. 終わりに

本研究は、LINE チャットの会話を対象とし、相づちの頻度と表現形式について日本語母語場面と韓国語母語場면을比較した。その結果、LINE チャットの会話においても音声会話同様、日本語母語場面の方が、韓国語母語場面より相づちの頻度は高かった。また表現形式については、日本語母語場面と韓国語母語場面では使用傾向に違いが見られ、日本語母語場面は、「概念的表現」、「繰り返し」といった具体性の高い相づちが有意に多く、韓国語母語場面は「感声的表現」が多く、反射的な感情や認識の変化を即時的に簡潔に送信して、話し手の話の内容自体に踏み込んだり、話を遮ったりしないという傾向が見られた。

上記の結果から、LINE チャットの会話における日本語母語場面の相づちには、離れたメッセージも含め、多くの相づちを送信し、日本語母語場

面の表現形式に関して具体的な内容を表す概念的表現や繰り返しを多く用いて聞き手として積極的に会話に関わることで、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく」（水谷, 1993: 6）という共話的な特徴が見られた。また、韓国語母語場面においては、相づちの頻度は低く、相づちも具体性の低い簡潔な感声的表現で話し手の話を遮らず「聞き手は話し手の文ないし発話が完結するのを黙って待つ」（水谷, 1993: 6）という対話的な特徴が見られた。

本研究により、音声会話に見られる日本語母語場面の相づちの共話的な特徴、韓国語母語場面の相づちの対話的な特徴が、LINE チャットの会話の相づちにおいても同様に見られることが明らかとなった。井上（2005）は、新しいコミュニケーション手段が生じたときに、その新しいコミュニケーション手段における談話の規則は、全く新しいものではなく、類似のコミュニケーション手段の談話の規則を援用しつつ、新しいコミュニケーション手段に応じた規則ができると指摘している。LINE チャットの会話における相づちの頻度や表現形式においても、音声会話における相づちの規則を援用した結果、音声会話とはまた異なる実現の仕方ではあるものの、日本語母語場面には共話的な特徴、韓国語母語場面には対話的な特徴が見られたと考えられる。

今後の課題としては、LINE チャットの会話における相づちの機能など異なる観点から見た場合に日本語母語場面に共話的な特徴が、韓国語母語場面对話的な特徴が見られるのかどうか調べる必要がある。また、今回は日本語母語場面と韓国語母語場面对照することにより、それぞれの LINE チャットの会話の特徴の一端を明らかにしたが、今後は日本語母語場面と中国語母語場面など異なる母語を対照する必要もある。このような分析の積み重ねにより、LINE チャットの会話の様相を明らかにしたい。

【謝辞】

本論文に対して貴重なご指摘を下さいました査読者の先生方に感謝を申し上げます。

《注》

- (1) 倉田 (2022) によると、日本語母語場面の相づち全 515 回のうち直後の相づちが 263 回であるのに対し、非直後の相づちは 252 回であり、韓国語母語場面の相づち全 393 回のうち、直後の相づちが 327 回で、非直後の相づちが 66 回であったという。
- (2) Werry (1996), 三浦・篠原 (2002) は、PC チャットの会話の特徴として極端に簡略化した言葉遣いが見られると指摘している。西川・中村 (2015) は、三浦・篠原 (2002) の指摘をもとに、LINE コミュニケーションが従来からあるオンラインチャットの特徴を持っているとし、その一つとして極端に簡略化した言葉遣いという特徴を挙げている。
- (3) LINE と同等の機能を持つ KakaoTalk を分析対象としている。
- (4) 韓国語母語場面では、LINE と同等の機能を持つ KakaoTalk による文字チャットをデータとして用いている。
- (5) 杉戸 (1987) は実質的な発話を「あいづち的な発話以外の種類の発話。何らかの実質的な内容を表す言語形式を含んで、判断、説明、質問、回答など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話」(p.88) としている。
- (6) 指示詞の体系は、日韓両言語とも三系列（近称・中称・遠称）を区別し（油谷, 2005）、日本語の「コ」に当たる語には^ㅇ, 「ソ」に当たる語には^고, 「ア」に当たる語には^저がある（森下・池, 1992）。

参考文献

(日本語)

- アブリヤント, オキ・ディタ (2015) 「日本語とインドネシア語のあいづちの使用に関する対照研究——頻度とタイミングをめぐる——」『日本語・日本文化研究』25, 133-143.
- 李善雅 (2001) 「議論の場におけるあいづち——日本語母語話者と韓国人学習者の相違——」『世界の日本語教育』11, 139-152.
- 井上史雄 (2005) 「情報化と若者の言語行動」橋元良明 (編) 『講座社会言語科学第2巻メディア』ひつじ書房, 40-54.
- 任榮哲・李先敏 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日

- 本語教育』5, 239-251.
- 任栄哲・井出里咲子 (2004) 『箸とチョッカラク——ことばと文化の日韓比較』大修館書店
- 大塚容子 (2016) 「初対面の 2 人会話におけるあいづち行動——非言語行動を含めて——」『岐阜聖徳学園大学紀要 外国語学部編』55, 71-83.
- 大浜るい子 (2002) 「相づち使用と対人関係」『広島大学日本語教育研究』(12), 1-9.
- 岡本能里子 (2016) 「雑談のビジュアルコミュニケーション——LINE チャットの分析を通して——」村田和代・井出里咲子 (編) 『雑談の美学——言語研究からの再考』ひつじ書房, 213-236.
- 岡本能里子・服部圭子 (2017) 「LINE のビジュアルコミュニケーション——スタンプ機能に注目した相互行為分析を中心に——」柳町智治・岡田みさを (編) 『インタラクショントと学習』ひつじ書房, 129-148.
- 奥津敬一郎・沼田善子 (1985) 「日・朝・中・英のあいさつ言葉」『日本語学』8 (4), 53-69.
- 生越直樹 (1988) 「朝鮮語のあいづち——韓国人学生のレポートより——」『日本語学』7 (13), 12-17.
- 姜昌妊 (2001) 「日韓男女のあいづちの対照研究」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』13, 45-60.
- 姜昌妊 (2004) 『母語場面と接触場面における会話行動の日韓対照研究——ターン, あいづち, 重なりを中心に——』武庫川女子大学博士学位論文 (未公刊)
- 〈http://www.riss.kr/search/detail/DetailView.do?p_mat_type=be54d9b8bc7cdb09&control_no=6a4dfaad2892c020#redirect〉(2022 年 6 月 11 日)
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能——兵庫県滝野方言について——」『国語学』150, 109-122.
- 小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態——出現傾向とその周辺——」『語学教育研究論叢』3, 43-62.
- 倉田芳弥 (2006) 「チャットの接触場面における談話管理——日本語母語話者と非母語話者の相づちの比較から——」『人間文化論叢』8, 277-288.
- 倉田芳弥 (2018) 「接触場面の LINE の会話における相づちの機能——日本語母語話者と非母語話者の比較から——」『人文科学研究』14, 83-97.
- 倉田芳弥 (2021) 「日韓接触場面の LINE チャットの会話における相づちの表現形式——日本語母語話者と非母語話者の比較から——」『聖学院大学論叢』33 (1・2 合併), 37-52.

- 倉田芳弥 (2022) 「日韓接触場面の LINE チャットの会話における相づちの送信方法の分析——相づちの出現箇所に着目して——」『拓殖大学日本語教育研究』7, 1-26.
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」国立国語研究所 (編) 『国立国語研究所報告 92 談話行動の諸相——座談資料の分析——』三省堂, 68-106.
- 総務省情報通信政策研究所 (2021) 『令和2年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』
(https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf) (2022年6月4日)
- 崔ハナ (2011) 「日本人と韓国人のあいづち比較: あいづちの頻度, タイミング, 機能について」『国文目白』50, 100-113.
- 永田良太 (2004) 「会話におけるあいづちの機能——発話途中に打たれるあいづちに着目して——」『日本語教育』120, 53-62.
- 西川勇佑・中村雅子 (2015) 「LINE コミュニケーションの特性の分析」『東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル』16, 47-57.
- 堀口純子 (1988) 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26.
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 洪珉杓 (2007) 『日韓の言語文化の理解』風間書房
- 三浦麻子・篠原一光 (2002) 「チャット・コミュニケーションに関する心理学的研究」『対人社会心理学研究』2, 25-34.
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7 (13), 4-11.
- 水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12 (4), 4-10.
- 水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『月刊言語』30 (7), 46-51.
- 宮永愛子 (2013) 「日本語学習者の相づち表現の分析——接触場面の雑談データをもとに——」『金沢大学留学生センター紀要』16, 31-43.
- 森下喜一・池景来 (1992) 『日・韓語対照言語学入門』白帝社
- 油谷幸利 (2005) 『日韓対照言語学入門』白帝社
- 呂萍 (2010) 「中日語の電話による会話におけるあいづちの使用——頻度と出現位置に着目して——」『国際文化研究』16, 109-121.
- 渡辺恵美子 (1994) 「日本語学習者のあいづちの分析——電話での会話において使用された言語的あいづち——」『日本語教育』82, 110-122.
(韓国語)
- 강창임 (2009) 「접촉장면에 있어서의 한·일 양국의 맞장구 사용양상: 모어화자와 목표언어학습자의 비교를 중심으로」『日本學研究』27, 461-483. (カンチャンイム (2009) 「接触場面における韓・日両言語のあいづちの使用様相

について —— 母語話者と目標言語学習者との比較を中心に —— 』『日本学
研究』27, 461-483.)

최명원・김선영・김지혜・이애경 (2012) 「SNS 메신저 ‘카카오톡’ 언어현상
연구」『텍스트언어학』33, 469-495. (첸미ョン웬・킴손욘・키
ムジヘ・イエギョン (2012) 「SNS 메ッセン저 ‘KakaoTalk’의 言語現
象の研究」『텍스트言語学』33, 469-495.)

(英語)

Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for
the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-
735.

Werry, C.C. (1996). Linguistic and interactional features of Internet Relay
Chat. In S.C. Herring (Ed.), *Computer-mediated communication: Linguis-
tic, social and cross-cultural perspectives*, Amsterdam: John Benjamins
Publishing Company, 47-63.

【付記】

- (1) 本研究は科学研究費基盤研究 (C) 「LINE をプラットフォームとした多
言語多文化社会におけるネットワーク構築」(平成 28 年度～30 年度課題番
号: 16K02803 研究代表者: 佐々木泰子) で収集したデータを使用してい
る。ここに記して感謝の意を表します。
- (2) 本論文は、博士学位論文(倉田芳弥 (2019) 「LINE の会話における相づ
ちの研究 —— 日韓母語場面と日韓接触場面との比較から —— 」お茶の水女
子大学大学院博士学位論文(未公刊), 1-154.) の日本語母語場面と韓国語母
語場面のデータにデータを追加して再分析し、本文の一部を加筆・修正し
たものである。
- (3) データの収集に先立ち、筆者のデータ収集当時の所属大学の倫理審査委
員会に申請し、必要な手続きを完了している。

(原稿受付 2022 年 6 月 21 日)